

自分に必要な力

弘前市立第一中学校

三 浦 可 帆

対象作品／梨木香歩著『西の魔女が死んだ』新潮社

私は『西の魔女が死んだ』という本を読んだ。この本を選んだ理由は、去年この本の著者である梨木香歩さんの『裏庭』という作品を読み、集中して読めたため、他の作品も読んでみたいと思ったからだ。

主人公は「まい」という中学生だ。クラスの中で「敵」に決められ、学校に行くのが嫌になってしまい、ひと月あまりを「西の魔女」ことおばあちゃんの家で過ごす。そこで「魔女修行」が始まり、様々なことを学んでいくという物語だ。この話の中で印象に残っているおばあちゃんの言葉が二つある。

一つ目は、「魔女になるためにも、いちばん大切なのは、意示の力。自分で決める力。自分で決めたことをやり遂げる力です。」という言葉だ。なぜなら、意示の力は、魔女だけでなく、普通の人間に生きしていくために必要な力だと思つたからだ。私はいつも人の指示を待つてしまい、自分で決めて行動することが全くできない。そのため、この言葉を目に

した時、これはどこでも同じく、大切なことなのだとと思った。魔女修行を始めた時に、おばあちゃんはまず基礎トレーニングとして「精神を鍛える」ことをあげた。そしてこの言葉を発して、「そんな簡単なことつていいますけれど、そういう簡単なことが、まいにとつてはいちばん難しいことではないかしら」と言つた。私も簡単だと思うことほど難しいと思う。自分で決めることは難しく、迷うことが多くあるが、その分責任をもつてやり遂げることができるようになると考えた。部活や学校生活で少しずつ簡単なことからでも自分で決めて、集中して取り組めるようになりたい。そして、無駄な時間を減らして自分がやりたいことをより多くできる生活をしたい。

二つ目は、「死ぬ、ということははずつと身体に縛られていた魂が、身体から離れて自由になることだと、おばあちゃんは思つています。きっとどんなにか楽になれうれしいんじゃないかしら」という言葉だ。理由は、死ぬということを暗

くとらえず、楽になれると考へているのがすごいと思ったからだ。まいは父親に、人は死んだらどうなるのかと聞いたことがあるたが、あまり良い答えをもらえず、おばあちゃんにも同じことを聞いた。そのときにまいをなぐさめながらおばあちゃんが自分の考へ話をした。最近、戦争に関する番組や歴史人物の本を読んで、「死ぬとどうなつてしまふのだろう、怖いな」と考へることがよくある。魂が身体から離れるという考へは自分にもあつたが、生きていた頃の自分の意識は残つてゐるのか、魂はどこにいくのか、ということを考えると不安になる。「死ぬ」ということは暗いイメージが多いが、長い間頑張つた魂が休けいするために、人間には死があるのかなと思つた。そして、また新しい身体に魂が入り、生まれ変わつた時に前世の生活、自分の力が役に立てば良いなと思う。

「死」に關することだけではなく、何に対しても良いイメージを作ることはとても大切なことだと思つ。私には苦手なことがあるとマイナスなことばかり考へてしまふという短所がある。まいのおばあちゃんは、まいにとつて悪い印象の人がいてもその人の長所を知つてゐると思う。そのように、まずはプラスになることを探して努力していくば、少しずつでも楽しくなることが増えると思う。そのため、楽しむためには

文句ばかり言つのではなく、人の倍努力をして授業などの回数が増えるたびに、何か成長したことがあるということが必要だと思う。そしてその状態が続くことが最も良いことだと思う。おばあちゃんが教えてくれることは誰にとっても大切なことで、まいも物語が進むにつれてどんどん明るくなつたと思う。まいは転校することになるが、私がまいに声をかけようとしたら、新しい学校では、まいが前からもつていた真つすぐ生きようとする強さを捨てずに楽しんで頑張つてねと伝えたい。

その後のまいの日常が書かれた『渡りの一日』に登場するショウコは、まいの強さを認めているからこそ仲良くできるいると思う。ショウコの、自分と違う考へ方をしている人でも最初から否定しないという考へ方を見習つて、様々な考へ方を自分もできるようになりたいと思つた。

この本を読んで、私は自分で考へて行動する力、物事に対し前向きな姿勢で取り組む力、自分にない考へ方を知るうとする力が今の自分に必要な力だと思つた。これから、何事に対しても努力をして自分の力にできるものをつくつていきたい。そして大人になつて振り返つた時に、後悔することが少なく、楽しかつたと思えることを増やしていきたい。